

「錦絵江戸姿・旗本と町奴」 「怒苦呂」



佐藤 忠男

映画評論家
日本映画学校校長

市川右太衛門は稀有の映画スターである。なにしろ人気のあった期間が長い。一九〇七年の生れで五歳で歌舞伎の初舞台を踏み、十八歳でスカウトされて映画俳優としてデビューした。最初からスターであり、一九六四年までに三六〇本以上の作品に出演した。人気落ちて主演をやれなくなったときは引退するときだときめていた。主役と同格の特別出演作品は何本かあるが、脇役はついにやらなかった。敗戦後に占領軍の命令で時代劇が制限されていた一時期を除いて出演作は全て時代劇であり、立派な侍か侠客だった。

美男で強そうで堂々としているだけでなく、明るくて楽しそうところが大衆的な人気の源泉だった。一九三八年の作品である「錦絵江戸姿・旗本と町奴」は、その明るさがよく出ている作品である。旗本というのは江戸時代の江戸幕府の徳川將軍直属の侍であり、將軍直属だから身分としては大名と同格だと誇りが高かった。ただたくさんいた旗本の皆がその身分にふさわしい役目を与えられていたわけではないので、不平をかかって徒党を組んで暴れるような不心得者もあり、これを旗本奴（やっこ）と呼んだ。この旗本奴と、力には力で対抗して喧嘩をした町人たちがおり、これが町奴（やっこ）で、江戸の侠客のはじまりである。この映画で市川右太衛門が演じている主人公は、もともとは旗本の家の子に生れたのに、いばった侍になるのを嫌って町奴になっていて、町人をいじめている旗本に喧嘩を売って町人たちから喝采されている。生れついで自由人であり、愉快的ヒーローなのである。そして侍の身分に縛られて愛する召使の女性との恋も全うできない兄貴を助けて痛快な計略を実行する。

市川右太衛門はこういう明朗な快男子という役どころで大衆的な人気を確かなものにしていただけだが、それだけしかやらなかったわけではない。若い頃にはかなり深刻な役で悲壯な演技もしている。デビューしてまもない時期の作品である「怒苦呂」は、現在残っているフィルムは一部分だけであるが、悲劇的な作品で、出世作のひとつであり、評判になったものである。

歌舞伎俳優時代に日本舞踊で鍛えた身のこなしの美しさは立回りの見事さに生かされてファンをうならせた。他方、溝口健二監督の「元禄忠臣蔵」の徳川綱豊の役など、立回りのない微妙な会話劇だが、じつに重厚な名演技であった。しかし自分の本領は大衆的なチャンバラにこそあると考えて、自分を大きく立派に見せることに努力を集中したのである。本人はぜんぜんいばらない気さくな人柄であったが、映画では本当に堂々と見え、年をとるに従っていっそう大きく見えるようになっていった。